

福音派神学の動向、問題、および展望¹

藤原淳賀

序

シカゴ大学で長く教えてきたマーティン・マーティは NAE (National Association of Evangelicals) Convention in Minneapolis, 2003 で福音派に対して「あなた方が勝利した (You have won !)」と語ったという。アメリカにおける主流派との葛藤において福音派が勝利した。アメリカの主要都市における代表的教会は福音派であり、アメリカの宗教放送の約 90% は福音派が握っている。アメリカの約 240 の神学校のうち約 70 が福音派であるが、全神学生の半分以上は福音派であり、アメリカにおける大教会のトップ 100 は実質的に全て福音派とあってよい、という。しかしゴードン・コーンウェル神学校のボブ・ウィンツは、しかしそれはどのような勝利なのか、と問う。主流派教派との競争には勝ったかもしれないが、福音派は断片化してしまっているという。カール・F・H・ヘンリーが提唱したような社会への関わりを継承できず、1950 年代と 1960 年代には、社会の変動に十分に対応できなかった。市民権運動には全く関わっておらず、今日でもその汚名を十分に返上できているとは言い難いという²。

¹ 本稿は、福音主義神学会全国神学研究会議「福音主義神学、その行くべき方向—聖書信仰と福音主義神学の未来—Evangelical Theology : The Way Forward」(2014 年 11 月 5 日、関西聖書学院) での招待発題に加筆修正したものである。

² Bob Winz's Lecture, "Evangelicals and Public Life," from "What is Evangelical?" held at Gordon-Cornwell Theological Seminary in 2012. National Black Evangelical Association が NAE (1942 年設立) とは別団体として 1964 年に設立されたのは、福音派が市民権運動に適切な対応をしてこなかったことに原因があるとウィンツはいう。福

福音派運動 (Evangelical Movement) はある態度を伴った運動であり、福音派の中でも多様性がある。本稿では、「福音派」という語を、特にファンダメンタリズムへのリアクションとして 1940 年代から現れたネオ・エヴァンジェリカルズをさして用いている。それは北アメリカにおいて大きく発展した³。日本では、米国の強い影響を受けながらも、当然のことであるが、米国や英国の福音派とも異なる「日本の福音派」が形成されてきている。そういう意味で日本独自の特徴と問題があるといつてよいであろう⁴。

本稿の目的は、世界における福音派全体を意識しながら、特に日本の福音派の問題点を指摘し、今後向かうべき一つの方向を示すことである。結論を先取りして提示するなら、福音派は二重のリアクション (リベラリズムへのリアクションとファンダメンタリズムへのリアクション) を内に含んでおり、日本の福音派の中心的問題は、(福音派とファンダメンタリズムは異なるという主張にも関わらず見られる) ファンダメンタリスト的保守主義的傾向性と、(聖書を重んじているにも関わらず見られる) 十分に徹底していない聖書中心主義であると筆者は考えている。

1. 福音派の性質：その起源、意図、そして戦い

福音派の根本的確信としてアリスター・マクグラス教授は以下の 6 つを挙げ、論じている。「1 神についての知識の源泉、キリスト者の生き方の指針、としての聖書の最高権威性。2 人となられた神であり、主であり、また罪深い人類の救い主でもあるお方としてのイエス・キリストの尊厳性。3 聖霊の主権性。4

音派は、社会変革の方法として、個人的救いによって社会に間接的に影響を与えることを唯一の方法だと考え、直接的に社会問題に関わることから距離を置いてきたということである。

³ 米国以外の福音派については以下を参照せよ。アリスター・マクグラス『キリスト教の将来と福音主義』島田福安訳 (いのちのことば社、1995 年) 45-46 頁

⁴ アリスター・マクグラス教授は来日時に、英国のアングリカンの牧師の 67% が自らを福音派 (Evangelical) と考えているといっておられた。また米国の福音派と英国の福音派の違いは、以下の 3 つの領域に現れているということであった。すなわち聖書の無謬性、進化論、そして戦争に対する態度である。それは英国の福音派が根本主義的ではなく、アカデミズムを重んじてきたということと関係しているであろう。

個人的回心の必要性。5 個人としてのキリスト者、ならびに全体としての教会にとつての、伝道活動の優先性。6 霊的養育、交わり、成長のための、キリスト者共同体の重要性」⁵。これらは福音派が皆大切にしているものであり (イングランド国教会というエスタブリッシュメントの視点からのアナバプテストへの多少不当な批判を除いては) 適切な解説であり有益である。

しかし本稿では、福音派の性質、現在の動向と将来への展望を、福音派の歴史と関係づけて論じていきたい。およそ実存的になされている思索、あるいは運動というものは真空状態から生じるものではなく、しばしば現状へのリアクションとして、戦いの中で生まれている。その性質を理解するには、それが戦っている相手を明確にすることが有益である。従って、福音派の始まりと性質、そして福音派の戦いを見ていきたい。

A. 聖書主義、正統主義、敬虔主義、ピューリタニズムそしてリヴァイヴァリズム

19 世紀に日本に入ってきたプロテスタンティズムは、広い意味での福音的キリスト教であり、宗教改革の伝統の下、聖書を神の言葉として信じる聖書主義、神の前における敬虔さを重んじる敬虔主義、動的な神の働きを重んじるリヴァイヴァリズム、そしてピューリタンの倫理を受け継いでいた。

1. 宗教改革：聖書主義、信仰義認、万人祭司

ルネッサンス期の人文主義は原典研究を重んじた。それは宗教改革者たちが聖書の原典研究を通して、聖書に見られる初期の教会の福音を再発見する道備えとなる。また 15 世紀後期、イタリアのベネディクト会修道院で「福音的」という言葉が用いられるようになり、更には 1520 年代イタリアの貴族の一般信徒の間で個人的救済に注意が払われるようになる⁶。

⁵ マクグラス『キリスト教の将来と福音主義』74-120 頁。マクグラス教授は英国の福音派の中で起こった「運動」に対して批判的であり、またピューリタンの分離派の記憶の観点からアナバプテストを批判している。

⁶ マクグラス『キリスト教の将来と福音主義』23 頁。後期ルネッサンスの信徒運動に福音的なものが見られるのだが、このような福音的時代精神が宗教改革前後にあったことは注目される。

福音派は基本的にプロテスタントの運動であり、したがってその直接的に重要なルーツは宗教改革にある。宗教改革者たちにとって、「いかにして人が救われるか」という問いは中心的関心事であった。特にルターにとってこれは実存的な問いであった。神の言葉としての聖書に唯一の権威を見出し、学術的研究から、信仰を通しての恵みによる義認という教理を再発見する。そしてカトリック教会によるルターの破門により、カトリック一枚岩の世界であった西ヨーロッパにアウグスブルグ信仰告白派（プロテスタント）が生まれてくる⁷。宗教改革初期には、*Evangelisch* という語が頻繁に用いられており、またよく知られていることであるがドイツで語圏では *Evangelisch* は即ちプロテスタントを意味する。福音派はプロテスタント宗教改革から聖書主義と信仰義認の教理を受け継いでいる。また後述するように、宗教改革のもう一つの重要な教理、万人祭司を受け継いでいる。

2. 正統主義と敬虔主義

宗教改革者たちのダイナミックな戦いの後に教会が経験したのは正統主義の時代であった。教会は宗教改革者たちが切り開いた道を正確に保持・継承しようとした。正統主義は宗教改革の学術的継承であり、福音派はしばしば正統主義の教義理解に自らのルーツを見出す。

しかしルターにはたとえばその聖餐理解にしてもキリストの現臨という神秘的な要素があったのだが、正統主義は信仰を客観的、知的営みとしていくようになる⁸。それに対して敬虔主義は信仰の観点からでないと正しい神学はできないと考えた。福音派は、聖霊の臨在、キリストの喜び、といったデボーショナルな要素を正統的神学と共に非常に重んじる。このような福音派の内面的要素には、17世紀に正統主義へのリアクションとして起こった敬虔主義の遺産が見

⁷ ルターは新しい教会論を発展させていない。まだカトリック教会への回帰も考えられる時代であった。そういう意味で、マクグラス教授がいうように、プロテスタントは本来、分離主義的なものではなかったといってもいい。プロテスタントの教会論を発展させるのはカルヴァンであった。このころには既にカトリック教会との決別は不可避となっていた。

⁸ Paul Tillich, *A History of Christian Thought*, ed. Carl E. Braaten (New York: A Touchstone Book), pp. 283-284.

られる。

3. ピューリタニズム

ピューリタンは神を畏れること、神の前に正しく生きることの大切さを強調した。この道徳的なプロテスタント・キリスト教は、アングロサクソンの伝統に特徴的に見られる。宗教改革、正統主義、敬虔主義といった大陸の要素と共に、アングロサクソンの「ピューリタンの真面目さ」が、英米から日本に入ってきたプロテスタント・キリスト教に引き継がれている。そして福音派のキリスト教の遺伝子の中にもそれが見られる。

デービッド・ホール教授（ハーバード大学）は嘗て *Evangelicals* を、リヴァイヴァルを経験したピューリタンと表現したが、それは広い意味での福音主義的キリスト教を理解するのにある意味でわかりやすい表現である。イングランド国教会の改革を徹底することを求めるピューリタンたちは、正しい教会のあり方、正しい生き方を求めたが、彼らは神の愛についてよりも神の裁きを畏れる傾向が強かった⁹。正しい信仰理解、正しい倫理理解に動的な命を吹き込んだのはリヴァイヴァルであった。

4. リヴァイヴァリズム

英国と米国で起こったリヴァイヴァリズムの福音派への影響は非常に大きい。ジョン・ウェスレー、ジョージ・ウィットフィールド、ジョナサン・エドワーズらがキープレーヤーとなったリヴァイヴァルは、教会の信仰を復興した。更には、社会を道徳的に活性化した。特に米国においては、第一次大覚醒運動（1730s-1750s）は、北米の植民地にキリスト教的共同体アメリカとしての一体感をもたらした¹⁰。リヴァイヴァルは様々な壁を超えるダイナミズムを内包する。リヴァイヴァルは、「自分たちの地域」を越えた神の働きと自分たちの成すべき使命へと人々の思いを駆り立てた。これは世界史的には、米国独立の道備えと

⁹ 神を愛することと神を畏れることは共存できるが、後者のほうがピューリタンたちには強い。

¹⁰ 森本あんり『アメリカ・キリスト教史——理念によって建てられた国の軌跡』（新教出版社、2006年）52頁

なっていく。

聖書主義と信仰義認に加えて、プロテスタント宗教改革のもうひとつの遺産は万人祭司であった。これらが組み合わされる時、信徒伝道が行われる可能性と、教派が増え続けていく可能性が生まれてくる。しかしそれが起こるのは、教会の規制の厳しいヨーロッパではなく、広大で自由な北アメリカ大陸においてであった。アメリカはフランスから土地を購入し (Louisiana Purchase, 1803)、西へ西へと広がっていく。第二次大覚醒運動 (1800s-1830s) は、広がりつつある国土に対応していく教会にキリスト教的信仰の刷新と柔軟な信徒伝道をもたらした。エピスコパル、長老派、カトリックは規則が厳しく、変わりつつある状況に柔軟に対応するのは難しかった。しかしバプテストとメソジストは新しく作られる町々に信徒伝道者を送り、教会を形成していった。聖書があり、信仰を持つ者がいれば、そこで伝道が行われ、教会を形成できたのである。リヴァイヴァルを通して現れてくる素朴なアメリカのキリスト教のかたちがここにある。英国で行われていたキャンプ・ミーティング (野営天幕集会) が導入され、立派な教会堂がないところでも伝道集会が持たれた¹¹。リヴァイヴァルの熱さは教派間の壁を超えた、キリスト教の一体感を再び社会にもたらした。そして回心した人びとは、キリスト者としての生き方を考える中で社会的な側面にも意識を向けるようになっていく¹²。

さて、1549年に日本に福音をもたらしたイエズス会は1534年にパリ大学で始まった。イエズス会に代表されるような16世紀の対抗宗教改革運動の担い手が海外宣教を積極的に進めていく中、プロテスタント教会では異教徒への伝道は主たる関心事とはなっていなかった。カトリック一枚岩であった西ヨーロッパで、新たに生まれたプロテスタントとして生き残っていくことに精一杯であったということもその一因である。事実ここから長い宗教戦争が始まっていく。

また大航海時代を初期に担ったのがカトリック国のスペインとポルトガルであったということもある。しかし後発国としてはあったが、英国、オランダは海外事業に参加していき、日本にも来ていることはよく知られている。しか

¹¹ 日本でもかつて天幕集会が持たれていた。

¹² これは後に奴隷制廃止運動、女性の参政権、禁酒運動にも発展していく。

し彼らは長い間、海外宣教に関心を持たなかった。事実、江戸幕府はキリスト教を持ち込まないということでプロテスタント国との交易を好んだ。

宗教改革直後のプロテスタントは、義認論や真の教会のしるしには関心があったが、宣教や回心の体験は主たる関心事ではなかった。同じ国教的キリスト教でありながら、カトリック教会は世界宣教を (植民地化と共にではあるが) 重んじた。そして Believers' Church に近い倫理的基準の極めて高い真摯な信仰共同体 (コンフラリア) をカトリック教会は日本で形成していった¹³。これはキリスト教迫害の中で彼らが生き残っていく一つの重要な要因となった。それに対して国教的プロテスタント教会はキリスト教世界内での伝道にも、海外宣教にも大きな関心は示していない。

プロテスタント教会が宣教に関心をもつようになるのは18世紀末であり、リヴァイヴァルを経験して以降である¹⁴。宗教改革は、福音派にとって明らかに重要なルーツであるが、そこに福音派の重要な特徴である宣教への緊急性の意識を見ることはできない。

更には、ジョン・ヨーダーが指摘するように、国教的プロテスタントには倫理構造的の問題がある。カトリック教会は、市民一般に常識的キリスト教的倫理を期待する一方で、献身者には高い基準の道德を求めた。カトリックにはそのような二重構造がある。それに問題がないわけではない。しかし国教的プロテスタントの問題は更に大きい。彼らは、行いではなく「恵みによる信仰を通しての義認」を強調し、また「万人祭司」を主張することによって、カトリックが持っていた高次の (献身者の) 倫理的枠を撤廃した。すなわち、自覚的信仰を持つ人も持たない人も含めたすべての国民のための国家教会として、より低い倫理性のみを構造的に持つキリスト教を形成していくことになる¹⁵。むしろ

¹³ Atsuyoshi Fujiwara, *Theology of Culture in a Japanese Context: A Believers' Church Perspective*, Princeton Theological Monograph Series 179, Eugene (OR: Pickwick Publications, 2012), p. 185ff.

¹⁴ 近代宣教の父 (Father of Modern Missions) と呼ばれるウィリアム・ケアリーがインドへと Baptist Missionary Society に送り出されるのは1793年である。

¹⁵ Fujiwara, *Theology of Culture*, p.94. 国教的キリスト教は、また高次の (外面的) 倫理性をすべての人に要求するピューリタンの現れ方をすることもある。しかし自覚的キリスト教信仰を持たない人に、自然法を超えた極めてキリスト教的な倫理

高い倫理性は、宗教改革の中から派生していく、コミットメントを持った信仰者の群れとしてのビリーバーズ・チャーチ（信仰を持った人々からなる教会）の伝統に見いだされる。それは宗教改革者からもカトリックからも迫害されながら平和主義を保持したアナバプテスト、また非国教的教会を形成した自由教会の伝統である。

B. 自由主義へのリアクションとしての根本主義、そして福音主義

17 世紀に起こった啓蒙主義の影響を受け、18 世紀、19 世紀に自由主義神学が発展していく。特に大学では、科学的研究が急速に発達していく中、文科系の学問でも理性を中心に置く学術的研究が求められていく。学術的に洗練された自由主義と比べ、素朴な聖書信仰は時代遅れのものとみなされるようになる。古代の神話をそのまま信じるのではなく、新しい時代の文化的基準に耐えうる新しいキリスト教の姿を模索するようになる。

そういった風潮の中、福音的キリスト教の側の動きとして注目されるのは、ロンドンでの福音同盟会 (Evangelical Alliance) の結成であった (1846 年)。これは国際的な福音主義の連合団体として 19 世紀に大きな影響力を持つようになる¹⁶。これはまた日本最初のプロテスタント教会である日本基督公会の誕生にも少なからぬ影響力を持っていた¹⁷。

日本のプロテスタント教会は、19 世紀の終わりにいわゆる新神学 (自由主義神学) が入ってくるまで広い意味での福音主義的キリスト教であった。20 世紀に入ったところで、海老名弾正と植村正久の論争 (1901 年) が起こり、自由主

を要求することはできない。

¹⁶ Evangelical Alliance は 1846 年ロンドンで結成された。世界福音同盟 (World Evangelical Fellowship) の前身。背景には、(1) 19 世紀のリバイバルによる教派を越えた協力の機運の高まり、(2) オックスフォード運動 (英) とユニテリアン主義 (米) に対する福音主義陣営の対応という側面がある。結成にあたり、9 箇条の信仰基準をあげており、その第一条は「聖書は神の靈感によって成ったものであり、権威と十全性を有すること」であった。中村敏『日本における福音派の歴史』(いのちのことば社、2000 年) 24 頁

¹⁷ 1872 年に誕生した日本基督公会は「日本基督公会条令」を定めたがそれは、Evangelical Alliance の教理基準 9 箇条のほぼ直訳であったという。中村敏『日本における福音派の歴史』(いのちのことば社、2000 年) 25 頁

義的キリスト教と福音主義的キリスト教との葛藤が明らかになっていくのであるが、その主流は後者であった。

変わりつつある時代の中、自由主義のキリスト教は自らを時代に合わせることで社会への影響力を保とうとした。世俗化は西洋社会において 19 世紀末から始まっていくのだが、特に第二次世界大戦後に急速に進んでいく。興味深いことであるが、北米において大学や社会における世俗化は、無神論的ヒューマニストといったキリスト教外の勢力によって精力的に推し進められたものではなかった。むしろキリスト教の内部から自発的に起こっていった。主流派プロテスタント大学では、神の真理は自由な研究を進めることでより明らかになると考えられていた。キリスト教の指導者たちが、大学では伝統的なキリスト教的権威を押し付けること無く自由に研究が進められるべきであると考え、それを実践していった。そして支配的地位からキリスト教が自発的に身を引いていく。自由主義的キリスト教は時代に合わせ、あるいは時代を先取りし、進歩的、人間中心的、そしてより包括的なキリスト教へと向かっていき、伝統的な信仰から離れていく。一般の人びとはその後もしばらく宗教的であり続けたが、プロテスタント・キリスト教の特権と占有地は社会の中で徐々に失われていった¹⁸。

変わりつつある時代の中、自由主義的キリスト教とは異なる道を選ぶキリスト教が現れてくる。その重要なものの一つがファンダメンタリズムである¹⁹。彼らは自由主義的キリスト教と同じく自らの社会に対する影響力を失いたくはないと考えた²⁰。しかし自由主義的キリスト教とは異なり、19 世紀の伝統的信

¹⁸ 1636 年設立のハーバード大学の学則 (Rule and Procepts) における教育の目的 (1646 年) は「永遠の命である神とイエス・キリストを知ること」(ヨハネ 17:3) であり、神の知恵を真剣に祈り求めることであった (箴言 2:3)。また 1692 年の大学のモットーは「キリストと教会のための真理 (Veritas pro Christo et Ecclesiae)」であった。しかし 20 世紀に入り世俗化の中 1935 年にその校章はシンプルな「真理 (Veritas)」となる。See “Harvard University. Corporation. Seals, 1650-[1926]: an inventory.” <http://oasis.lib.harvard.edu/oasis/deliver/~hua18011#copper> アリスター・E・マクグラス、『アリスター・E・マクグラス 宗教教育を語る』(キリスト新聞社、2010 年) 8-27 頁も参照せよ。

¹⁹ ペンテコステ派は、社会への影響を求めるよりも自分たちのグループを形成する方向に向かった。

²⁰ 自由主義キリスト教やファンダメンタリズムが社会への影響力を持つことを重

仰と道徳観、価値観を保持して、新しい時代の価値観と戦おうとした。それはまた時代に合わせて自らを変える自由主義的キリスト教に対するリアクションであったといってもよい²¹。ファンダメンタリズムの一つの特徴は対決的な姿勢である。彼らは真理のためには戦うべきであると考えた。ファンダメンタリズムは米国南部を主なテリトリーとした。彼らは南北戦争では負けたが、この信仰の戦いでは忍耐強く、諦めることをしなかった。

1910 年から 1915 年にかけて 12 巻本の『根本的事柄：真理の証 (*The Fundamentals: A Testimony to the Truth*)』が出版される。今日、根本主義という語は、反啓蒙主義、反知性主義、政治的過激主義を指す蔑称としてしばしば用いられるが、この語は本来、自称的な語であった。自分たちはキリスト教の根本的な事柄を重んじ、聖書の正統主義に立ち返る、という意味で用いられている。

1920 年に公立学校で進化論を教えることを禁じる法が南部諸州で成立する。ジョン・スコープスがテネシー州デイトンの高校でそれを破り進化論を教えて裁判となる。いわゆるスコープス裁判 (1925 年) である。裁判ではスコープスが裁かれたのだが、これはマスコミを通して広く報道され、この裁判を通してファンダメンタリズムが公衆の面前に晒され裁かれたといってもよい象徴的なできごととなった。

しかしファンダメンタリズムは厳しい批判の中でも死に絶えることはなかった。むしろ南部というアメリカのサブカルチャーの中で、自分たちの出版社を作り、放送局を作り、大学を作り次の世代に備えていった。自分たちの信じることを社会の中で実践でき、子どもたちを教育できる環境を整えていった。そして 20 世紀後半、再び宗教性が重んじられていく時代が訪れると、自らをそれまでに変えてしまっていた自由主義のキリスト教が衰退していく中、ファンダメンタリズムは広くアメリカ社会の中で再び影響力を持っていく²²。

ファンダメンタリズムは、自らの試みを初代教会への回帰、聖書への回帰と

んじたのに対し、ペンテコステ派、カリスマ派は社会から身を引く傾向があった。

²¹ ファンダメンタリストは、新正統主義に対しても批判的な態度を取った。

²² この洞察は Maxie Burch の講義 “The History of Christianity in America” に現れている。

いうのだが、実は極めて現代的な運動であることを覚えておく必要がある。ファンダメンタリズムは、自由主義がなければ出てくることがなかった反動的な運動である。

またファンダメンタリストたちは、自分たちが正統的神学と考える事柄についてチェックリストを作るような傾向があり、境界線を引き、敵と味方に分ける分離主義的傾向を持つ。彼らは聖書の無謬性、文字通りの解釈、イエスの処女降誕、代理的贖罪、肉体を伴った復活、事実としての奇跡、キリストの千年期前再臨等を欠かすことのできない事柄として主張する。フフがいうように、千年期前再臨説のように宗教改革者たちが主張していなかった事柄であっても、自分たちにとって欠かすことのできない重要な事柄であれば、聖書の主張としてリストに入れる傾向がある²³。このように、彼らが行っているのは単なる伝統への回帰ではない。時代の変化に対する現代的リアクションである。自由主義者の社会改革はこの地上に神の国をもたらしという点で千年期後再臨説と重なり、根本主義者はそれに対して戦おうとするのである。彼らは自由主義神学や社会の世俗化に対して戦っているので、攻撃的・防御的になる傾向も強い。

C. 福音派の登場とその性質：2つのリアクション

福音派 (Evangelical) という語が頻繁に用いられるようになるのは 1940 年台以降の英語圏においてである。そしてそれは特に第二次世界大戦後の米国において顕著であった。1942 年 NAE (The National Association of Evangelicals) が結成される。彼らは、始めネオ・エヴァンジェリカルと呼ばれたが、その後、単にエヴァンジェリカル (福音派) と呼ばれるようになっていく。彼らは自らを根本主義から区別しようとしていた。世俗化が急激に進んでいく中で、根本主義とは異なるかたちで福音的キリスト教の伝統を守ろうとしていた。彼らは伝統的な信仰を保持しつつ、アカデミックな研究の価値を認めた。また彼らは自らを社会から分離すること無く社会に関わっていこうとした。本稿が念頭に置いている「福音派」はこの運動である。

²³ Peter A. Huff, *What Are They Saying About Fundamentalisms?* (New York/Mahwah, NJ: Paulist Press, 2008).